

東日本大震災前後のパーソナリティと虚血性心疾患死亡リスクとの関連： 宮城県コホート研究

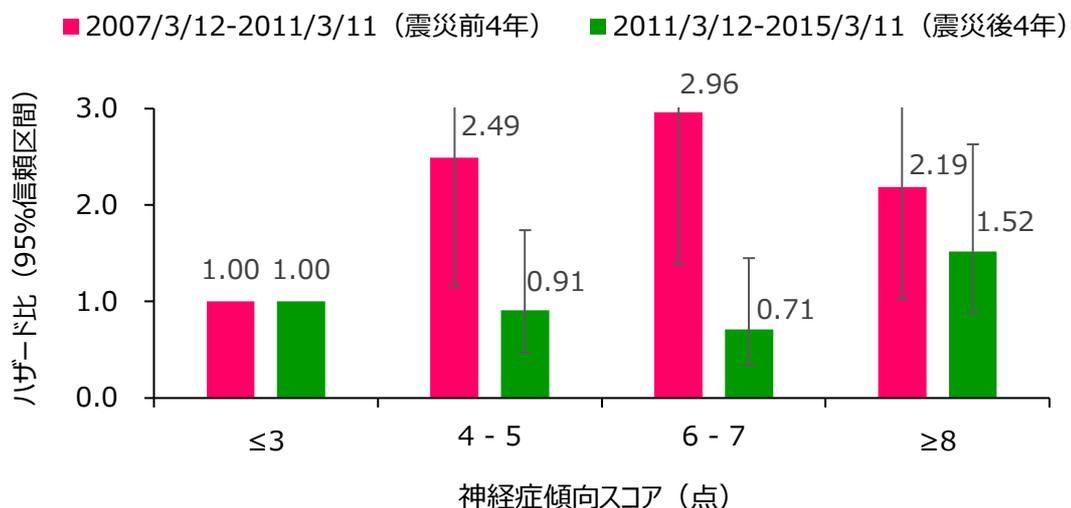
Association between personality and the risk of ischemic heart disease mortality before and after the Great East Japan Earthquake: Data from the Miyagi Cohort Study.

2023年 Journal of Psychiatric Research 発表

震災前と比べて、震災後の神経症傾向と虚血性心疾患死亡リスクとの関連は弱い

自然災害後は一時的に虚血性心疾患死亡が増加することが報告されている。一方、パーソナリティに関する先行研究は、神経症傾向が高い者では虚血性心疾患リスクが増加することを示唆しているが、大規模災害後の関連については明らかではない。そこで本研究は、東日本大震災前から継続している「宮城県コホート研究」のデータを用いて、震災前と後でパーソナリティと虚血性心疾患死亡リスクとの関連に変化があるかないかを調査し、大規模災害後の虚血性心疾患死亡の増加にパーソナリティが影響しているかどうかを検討しました。その結果、震災前と比べて、震災後の神経症傾向と虚血性心疾患死亡リスクとの関連は弱くなり、震災後の虚血性心疾患死亡の増加には他の要因が影響していることが示唆されました。

神経症傾向と虚血性心疾患死亡リスクとの関連—震災前後比較—



研究データについて

宮城県コホート研究では、1990年6月～8月に宮城県内14町村在住の40歳から64歳の男女51,920名に対して、2種類の自記式質問票（生活習慣に関する質問票、パーソナリティに関する質問票）を配布し、ベースライン調査を実施しました。2種類の質問票のどちらにも回答した有効回答者は、41,423名（79.8%）でした。このうち、パーソナリティに関する質問の全てに「はい」または「いいえ」と回答した者、いずれかの質問に未回答があった者、代理回答であった者、がん・心疾患・脳卒中の既往がある者を除外した29,065名について分析を行いました。ベースライン調査時から2015年3月末まで約25年間の追跡を行い、追跡期間中に虚血性心疾患による死亡者324件を確認しました。

パーソナリティに関する調査について

Eysenck Personality Questionnaire Revised (EPQ-R) を用いて、4つの尺度（外向性傾向、神経症傾向、非協調性傾向、社会的望ましさ）の評価を行いました。各尺度のスコアに基づいて、対象者を4分位に分けました。解析では、各尺度の最小4分位群を基準として、他の4分位群における虚血性心疾患死亡のリスクを算出しました。また、東日本大震災発災日（2011年3月11日）を基準として、震災前4年、震災後4年におけるパーソナリティと虚血性心疾患死亡リスクとの関連について比較しました。

他のリスク要因の影響について

本研究では、パーソナリティと虚血性心疾患死亡リスクに関連すると考えられている要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、年齢、性別、高血圧・糖尿病既往歴、喫煙、飲酒、BMI、学歴、婚姻歴、歩行時間といった要因について、グループ間に偏りがないように統計学的な処理を行いました。

研究の特徴と限界について

本研究は、大規模災害を経験した地域住民を対象として、パーソナリティと虚血性心疾患死亡リスクとの関連を検討した初めての研究です。

長所としては、(1) 前向きコホート研究で、追跡期間は約 25 年と長期間であること、(2) パーソナリティと虚血性心疾患死亡リスクに影響する多くの要因で調整した結果であること、(3) 震災の前後にも関わらず、追跡率は高い (91.8%) ことなどがあげられます。一方、研究の限界としては、(1) パーソナリティは、震災前のベースライン時に一度だけ調査されているため、震災後のパーソナリティの変化と虚血性心疾患リスクとの関連は検討できていないこと (2) 虚血性心疾患のリスクとなる追跡期間中の生活習慣の変化は不明であること (3) 震災後のメンタルヘルスや疾患治療、服薬、健診受診についての情報は不明であることなどが挙げられます。
